

みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 8 NO. 4

(通巻 33号)

昭和56年12月1日発行

編集・発行人 高橋 在久

〒 260

千葉市中央港1丁目10番1号

☎ 0472-42-8311 (代表)



浅井 忠「加茂川風景」

観潮台

著名な評論家の小林秀雄氏は「ゴッホの手紙」という、すぐれた本を書いている。彼がゴッホに打ちこむことになったきっかけは、上野の美術館でみたゴッホの最後の作品といわれている、オヴェールで描かれた「鳥のむれ飛ぶ麦島」の複製であったという。

自分はこの複製の絵からたいへんな衝激を受け、そこに坐り込んでしまったとも書いている。小林は「ゴッホの手紙」を書き上げてから数年後にアムステルダム美術館で本物と対面した。

最近では印刷技術も飛躍的に向上してきており、美術ブームを背景に古今東西にわたる名画を集めた画集が続々と出版されている。

しかし、いづれも数万円という値段のものが多く、欲しいと思っても手が出ない。居ながらにして世界の美術に接することができる美術全集やレブリカが学校図書館や近くの公民館図書室に数多く備えられることを望んでいる人たちは沢山いるにちがいない。

(安増 順)

特別展

浅井忠と

京都洋画壇の人々

特別展の概要

佐倉藩出身の千葉県ゆかりの作家である浅井忠は、黒田清輝と並ぶ近代美術洋画史の巨匠であり、開館以来本館が力を入れ調査研究をすすめている作家の一人である。昭和五十一年三月には、特別展「浅井忠とその師弟展」を開催し、浅井が近代洋画に果たした業績を展観した。

今回の特別展「浅井忠と京都洋画壇の人々」では、指導者として後進の育成に活躍した晩年の京都時代に焦点をあて、浅井とともに京都洋画の基礎をきざいだ田村宗立、鹿子木孟郎、伊藤快彦や浅井に指導をうけた梅原龍三郎、安井曾太郎、足立源一郎、斎藤与里、津田青楓、黒田重太郎、霜鳥之彦らの作品を一堂にあつめ、反官展アカデミズムの流れの礎をきざいだといわれる浅井の業績をふりかえる。

●浅井移住前の京都洋画

明治二十八年京都で二つの

大きな博覧会が開かれた。黒田清輝の裸体画「朝妝」が出品され議論をよんだ第四回内国博覧会と京都美術協会が開催した第一回新古典美術展である。これにより一般大衆の洋画に対する関心が高まり、また新古典美術展が毎年行なわれることになって、京阪の洋画家が一体となり、関西美術会結成の機運がうまれた。

関西美術会は明治三十四年に発足し、会頭に中沢岩太、委員には、田村宗立(一八四六、五一)、伊藤快彦(一八七〇)、小笠原豊涯(一八七〇)、牧野克次(一八四四、一四)らが名をつらねている。

同年第一回の批評会と関西美術会展が開かれたが、まだ内容に乏しく、東京美術学校や明治美術会からの協賛出品に補なわれていた。このような現状下の翌年三十五年、浅井忠を迎えることによつて、関西美術会は若い画家たちをリードする指導者を得て、発展することとなったのである。

京都高等工芸学校

明治三十三年より西洋画研究のため二年間のフランス留学に文部省より派遣されていた浅井忠は、パリで京都高等工芸学校の設立委員としてヨーロッパの工芸学校視察にきていた中沢岩太に出会い、新設校教授に懇望され、明治三十五年東京美術学校教授を辞任して、京都に移住した。

京都高等工芸学校に着任した浅井は、図案科の図画実習と色彩科の自在画をうけもち指導した。「まず絵が描けなければ図案などできるものではない」という浅井の教育方針によつて、授業に水彩画が用いられ、霜鳥之彦(一八四四)間部時雄(一八五九、一九六〇)長谷川良雄(一八四九、一四)等が輩出した。霜鳥之彦と間部時雄は第一期の卒業生である。霜鳥は卒業後牧野克次助教授に同行し渡米、大正十年高等工芸学校教授に就任、翌年渡仏してシャルル・ゲランに学び、帰国後は教授として後身の育成にとめた。

間部は卒業後関西美術院に入り、明治三十九年同院助教となった。のち渡欧し、帰国後は東京に住み白日会々員

として帝展・文展で活躍した。長谷川は第二回卒業生で、在学中から注目されたが、生涯を通じて特に画壇的交渉をもたなかった。しかし、水彩画家として終始した長谷川の画風は浅井の画風をよくうけついでいる代表的な一人である。

聖護院洋画研究所

浅井の京都移住以来、洋画を志すものが増え、明治三十六年これを機に桜井忠剛、伊藤快彦、牧野克次らの家塾を合併し、浅井の自宅を改造した聖護院洋画研究所が開設された。浅井を中心に、田村宗立、伊藤、牧野、都鳥英喜(一八七二、一四)らが指導に当り、その後鹿子木孟郎(一八七四、一四)がフランスから帰国し、それに加わった。京都におけるはじめの洋画研究施設である。

田村宗立は、東京の川上冬涯や高橋由一ともくらべられる、京都における洋画草創期の第一人者である。初めは仏画を描いていたが、油絵の存在を知つてから、米国人ポールドウィン、ドイツ人ランケツクらに油絵を学び、チャールズ・ワグマンをたずねて技法を修得した。明治十四年京都府画学校西宗の教師として

多くの後進の指導にあたった。浅井が深く尊敬していた人物である。

伊藤快彦は洛東若王子神社の神職の家に生まれ、田村宗立に教えをうけた後、上京して小山正太郎、原田直次郎に学んだ。明治二十六年京都で家塾鐘美会を開き、中林儀、加藤源之助が門下にあった。梅原龍三郎も十一才頃教えをうけたことがある。のち関西美術院の創立や経営にあたり、晩年は鹿子木辞任後空席となつていた院長の職を継ぎ、昭和十一年七十才で辞任するまでの長い間京都洋画壇に貢献した。

牧野克次は日本画を守任貫魚に、洋画を勇魚に学んだがその後洋画を志して小山正太郎の不同舎に入った。静岡県尋常師範学校の助教をつとめた後、大阪工業学校助教となつた。京都高等工芸学校開校準備のため京都に移住、明治三十五年同校助教に任命された。移住後間もなく家塾を開いたが、その門下には新井謹也、榊原一広、国松桂溪らがいいた。明治三十九年霜鳥と共に渡米し、ニューヨークの美術学校につとめた。

桜井忠剛は尼崎藩主の末裔

で、川村清雄に学び、東京府工芸品共進会で浅井と共に妙技二等賞を授賞するなど活躍し、その後大阪にもどったが関西美術会結成の時は京都の作家として参画している。郷里に帰り尼崎市長となったため、画壇から遠ざかった。

この様に聖護院洋画研究所は、すぐれた指導者が集まっている。その聖護院洋画研究所に学んだ人たちには、安井曾太郎(一八八八-一九五五)、梅原龍三郎(一八八八)、加藤源之助(一八八〇-一九四六)、小林價(一八六九-一九三〇)、新井謙也(一八四九-一九六六)、神原一広(一八三三-一九四二)、沢部清五郎(一八四九-一九四四)、国松桂溪(一八四九-一九六三)、田中志奈子などがいる。

加藤源之助は、浅井の画風を継承する優れた水彩画家として注目されていたにもかかわらず、家業を継いだため画家として生涯を終えなかった。小林價はおそらく門下中最も古くから画家として活動しており、浅井に学ぶ以前から京都美術協会展などで活躍、水彩画家として知られていたが、大正六年松本高等女学校教師となったからは画壇から遠ざかった。

また、芝千秋(一八七七一-一九五六)

小川千甕(一八八二-一九二〇)、久保井翠桐(一八六〇-一九二〇)、杉浦香峰といった日本画を学んでいた人たちも浅井を慕って入所した。しかし浅井は彼らが洋画に転向することを喜ばず、むしろ洋画の研究が日本画制作の役に立つ事を望み指導した。

芝千秋、小川千甕らは、明治三十九年革新的な日本画研究団体である丙午会を結成した。小川はのち南画で活躍し、芝は晩年は図案の制作を多くした。

おかれて黒田重太郎(一八七九-一九七〇)、西川純(一八六九-一九七四)、田中善之助(一八八九-一九四六)らが入所したが、その頃、のちに岸田劉生らと共に後期印象派の影響をうけてフェウザン会を結成した斎藤与里(一八八五-一九五〇)も鹿子木の家塾に学ぶかたわら聖護院洋画研究所に通っている。

関西美術院

明治三十九年研究所が手狭となつたため関西美術院が開設され、浅井は初代院長に就任した。教授には、伊藤、都鳥、鹿子木が名をつらねた。浅井の従弟にあたる都鳥英喜は千葉県佐倉の生まれで、浅井の教えをうけ、明治美術

会の新進として注目されていたが、浅井の転任により京都に移住し、京都高等工芸学校や関西美術院で指導と経営にあたり、浅井没後も後進の指導につとめた。

鹿子木孟郎は松原三五郎、小山正太郎に学び、明治三十三年渡米、翌年パリに渡りロランスに学び、三十七年帰国後京都で家塾室町画塾を開いた。パリで知りあった浅井の推挙で京都高等工芸学校の講師となり、聖護院洋画研究所の指導もした。浅井没後は高等工芸学校講師をつとめる一方、中沢岩太から継いで関西美術院長に就任、以後大正四年までつとめた。渡仏ののち、下鴨と大阪でアカデミー鹿子木塾を開いた。

この関西美術院では、研究所から移った人々の他、寺松国太郎(一八七六-一九四三)、津田青楓(一八八〇-一九七六)、足立源一郎(一八八九-一九五三)らが学んでいる。

この美術院は現代まで存続し関西は言うにおよばず、日本の洋画をリードした幾多の作家を輩出し続けている。

都洋画の基礎を築いた先達者たち、あるいは浅井に指導をうけた数多くの逸材の作品を一室に展示し、浅井が京都洋画に果たした役割と功績を再評価するものである。なお、同時に、浅井の生涯をより理解していただくため、資料コーナーを設け、スケッチブック、日記等も展示する。特に京都時代では図案を中心に、日本画、彫塑などの多面的な活躍を紹介したい。

会期

昭和56年12月5日(土)〜昭和57年1月17日(日)
開館時間は、午前9時〜午後4時30分
月曜日・年末年始(12月26日〜1月4日)は休館

入場料

大人三〇〇円(二〇〇円)
大・高生二〇〇円(一〇〇円)
中・小生一〇〇円(五〇円)
(○内は二十名以上の団体料金)

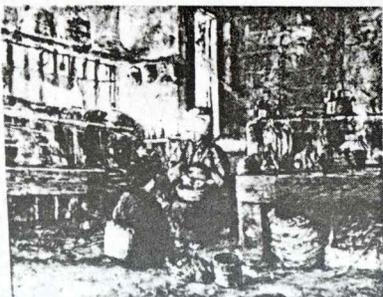
美術講演会

特別展に伴い美術講演会を次のとおり開催します。
演題 京都時代の浅井忠

講師 杉本秀太郎氏(京都女子大学教授)
日時 12月13日(日) 午後2時より 無料
会場 千葉県立美術館
共催 千葉県美術館
房総芸術文化協会

美術を語る会

展覧会について、「語り合い」の中から、作家や作品についての知識や理解を深めるために開催します。
話題 「浅井の遺業」
話題提供者 高橋在久(千葉県立美術館長)
日時 1月10日(日) 午後2時より 無料
会場 千葉県立美術館



伊藤快彦「厨の春」

浅井忠の京都転任考

高橋 在久

浅井忠は明治三十三年（一九〇〇）に東京美術学校教授として、文部省からフランスに派遣され留学した。「西洋画の研究ノタメ」で、二月二十八日に東京を出発し、明治三十五年八月二十一日に東京に帰着している。

普通ならば東京美術学校に当然帰任するところだが、帰国早々に新設の京都高等工芸学校教授に転任してしまつた。なぜこうしたことが起こつたのか。「浅井忠の美術史」では重要な問題であるが、先学が一応経緯を説明してくれている。要旨をあげると、浅井が留学中のパリで、京都高等工芸学校設立委員で初代校長になつた中沢岩太博士と出会い、絵画教育で意気投合した結果だという。一部の論評には、東京での黒田清輝との対立説が背景にあげられているが、特別展の企画中に、京都転任の原風景を考える機会があつたので、概要をお伝えしたい。

浅井はフランス留学中の明治三十四年九月十三日付けで、弟の達三あてに一通の手紙を書いている。そのなかで画壇を群れることの好きな気の小さな連中で、蝸牛角上の争いを続ける社会といつて愛想をつかし、党派心のない潔癖な大道を往く気概を見せ、フランスで得た国際的な美術観をあげ、自己否定的な感想まで書いている。

この手紙を書いた時は、すでに中沢岩太博士と出会い、京都へ移住して新設の学校での自律を決断後であつた。私は原風景論の立場から、浅井の京都転任に至るまでの心情を探つたが、どうやら二つの原体験が京都転任に作用していると思うに至つた。

浅井は佐倉市将門で、文久三年（一八六三）から明治六年（一八七三）までの、十年間を佐倉藩士族として生活したが、特に明治維新の間に体験しながら成人したが、ここで少年期の浅井は権力のもろさ

とむなしさに開眼した。従つて「宰相となりて大政を攬る」ことを周辺から期待されながら、権力に遠い画界に身を投じ反権力、反中央の歩みを始め、この思想の反映である画業は生涯不変であつた。浅井が明治三十三年（一九〇〇）にフランスに留学したころは、「新しい美術」を意味するアール・ヌーヴォー運動の全盛期であつた。流れるような曲線美を強調したこの芸術様式の、パリでの推進者サミュエル・ピングと会い、撮取に努め、「ぐりぐり式」と呼んだ。浅井は優れたフランス美術を見て反省していたシヨックのなかで、活路ともいうべき可能性を自覚し、アール・ヌーヴォーへの共鳴と制作表現を示した。

浅井の京都転任は中沢岩太博士との出会いが端緒になつたことはもちろんである。しかし決断の基礎になつた原風景には、浅井が直面した明治維新で自覚した反権力、反中央の生き方と、アール・ヌーヴォー実践の魅力が、ともに大きく作用して拍車となり、浅井に京都への道を選ばせたのではなからうか、というのが私の意見である。（館長）

新収蔵作品紹介(Ⅳ)

購入

中西利雄作

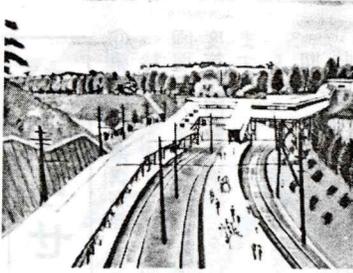
「四人の女」一九三九年

「曇り日の離宮と駅」一九四七年



中西利雄「四人の女」

位置を獲得した画家である。昭和六年、美校卒業後、足かけ四年の滞仏期間を経て帰国した中西は、翌年の日本水彩画会展と、上社会展に滞欧作品を多数出品し、その新鮮な近代感覚にあふれる魅力で多くの人々をとらえた。中西が独自の様式を身につけるようになったのは、この滞欧中、昭和四年秋頃に始まると見られている。昭和八年、中西は光風会員に挙げられ、昭和九年の帝展では、後藤工志以来久しぶりに水彩画による特選を受賞した。五十号の「優駿出場」であつた。昭和十年、帝展改組に反発して開かれた第二部会展でも、大作「婦人帽子店」で特選を受賞した。昭和十一年五月、日動画展での個展は、帰国後の中西の旺盛な制作意欲の展開を世に問うものであつた。その出品作は、これまでの水彩画がなし得なかつた自由な、近代的な表現によつて、モチーフにおいても、作品の大きさにおいても、絵の強さにおいても優に油絵に比肩しうるもので



中西利雄「曇り日の離宮と駅」

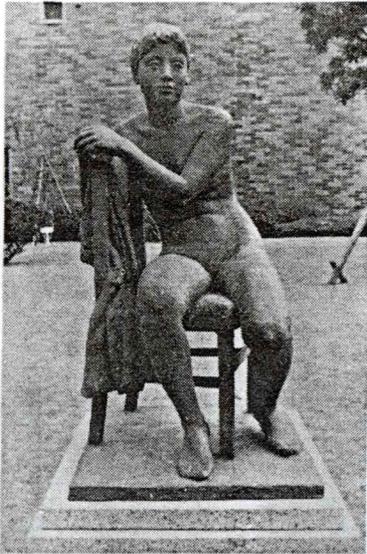
あった。この年、帝展改革のなまぬるさ、保守性にあきたらなかつた中西は、猪熊弦一郎、小磯良平、脇田和などの同志と、芸術運動の純粹化を唱えて、新制作派協会を結成した。

新収蔵の「四人の女」は、その第四回展に出品されたものである。

昭和二十三年十月、中西は四十七歳の若さで惜しまれつつこの世を去った。

「曇り日の離宮と駅」は、死の前年に描かれた作品である。水絵具という材質にもとづく表現上の制約を、水彩画本来の透明画法に、不透明画法を混入することによって乗り越え、独自の画面をつくりあげたのが中西の「水絵」であった。

美の泉



大須賀力「椅子の女」

玄関前の浅井忠像、そして本館の玄関ホール左側の中庭に大須賀力氏の制作にかかる「椅子の女」と題する乙女像が据えられおり、来館した方々をお迎えして好評である。このプロンズ像は、昭和五十年、氏の六十九才のときの作品である。

大須賀氏は東京神田の生まれだが、昭和のはじめから市川の中山法華経寺内に移り住み、ここを根城として今日もなお、かくしゃくとして制作活動を続けている。

氏の歩みは一貫してオーソドックスな具象彫塑であり、その中で漸次、独自の作風を形成してきたということができよう。

氏は昭和五年（一九三〇）東京美術学校（現芸大）在学中に帝展に初入選するという業績を示し、卒業後はさらに建畠大夢に師事して研さんを重ね、昭和七年の第十三回文展では、若千二十六才にして「首飾りの女」で特選に選ばれている。

以来、帝展、新文展、日展を舞台に数多くの作品を発表して注目を浴び、昭和二十四年以降は、ずっと日展審査員として、わが国の彫塑界をリードし、現在は日展評議員として重きをなしている。

昭和四十五年の日展出品作「手を挙げた女」は文化庁買上げとなり、四十八年出品の「或るポーズ」により内閣総理大臣賞があたえられた。

昭和六年の美校同期生からは日本画の東山魁夷、橋本明治、加藤栄三など逸材が輩出していることも興味のあるところである。

また氏の業績として忘れることが出来ないのは千葉県美術会の結成と育成に終始一貫献身的な努力を尽くしてきたことである。

紆余曲折を経て昭和十一年四月に開催にこぎつけた千葉県美術協会の第一回展の記録には彫塑部門の出品者は、大須賀力、大野信義、藤野天光、米倉峯光の四氏となっている。本年度県展の彫塑部門では会員、公募を含めて八十七点を数えるまで大きくなってきた。氏の今後の益々のご活躍を祈念して筆をおく。

（安増 順）

談話コーナー

美術館に行つて

小・五 西島研一

美術館は、絵を見るのに一番良い温度にしたり、絵を見やすいように展示したり、いろいろな苦勞をしていただく見学者の便を図っている。

絵というのは、見ていると絵の中に作者の気持ちが入ってくる。それも、遠くから見るとよく浮んでくるようだが。ただの絵でも、よく見るとただの絵ではないことがよくわかる。絵というのは遊び半分に見るのではなく、心を注いで見るものだと思う。

いちばんびつくりしたのは、三㎡もあるような大きな絵があったことである。せいぜい一㎡くらいの絵しか見ていないばかりには、恐竜よりも大きいくらいに感じられた。先生の話によると、もっと大きい絵もあるという。そんな絵も見てみたいと思う。こんどはほかの美術館にも行ってみたい。

○どうぞ皆さんもこのコーナーにご意見をお寄せ下さい。

お知らせ

◎第二回美術講演会

特別展「浅井忠と京都洋画壇の人々」に伴い、本年度第二回美術講演会を行います。

ふるってご参加ください。

- ・期日 12月13日(日)
- ・時間 午後2時～3時半
- ・演題 京都時代の浅井忠
- ・講師 杉本秀太郎氏(京都女子大学教授)

◎第五回美術を語る会

- ・期日 1月10日(日)
- ・時間 午後2時～3時半
- ・テーマ 浅井忠の偉業
- ・話題提供者 本館館長

◎版画入門講座

エッチング(銅版)、アクアチント等の基礎的な技法を学習する。

- ・期日 1月24日・25日
- 2月7日・14日
- 21日・28日

- ・講師 深沢幸雄氏
- ・申込締切 1月9日(土)

◎収蔵作品展

- ・会期 1月22日(金)～3月31日(水)
- ・内容 本館の収蔵作品、

及び関連資料

- ◎第十五回現代美術選抜展
- ・会期 1月29日(金)～2月11日(木)

・内容 各美術団体が中央において開催した団体展の受賞作品を一堂に展示する。

◎団体展(12月～2月)

- ・屈指の養分展 12・1～12・6
- ・第1回日本春秋書院千葉県書道連盟展 12・1～12・6
- ・第26回こども県展 12・8～12・20
- ・第17回登龍社・宮坂会書初展 1・5～1・10
- ・千葉県大学美術連盟展 1・5～1・10
- ・第4回千葉展 1・12～1・24
- ・親子絵画展 1・26～1・31
- ・葉美会展 1・26～2・7
- ・第34回千葉県小中学校書初展覧会 2・2～2・7

トビックス

●講演会・語る会

特別展「肉筆浮世絵展」に伴う第二回美術講演会が去る九月二十日、講師に山口桂三郎氏(立正大学教授)を招いて開かれ、肉筆浮世絵の芸術的意義や本展の代表的作家や作品について講演された。

また、第四回美術を語る会が去る十月三日に行われ、浮世絵研究家の長野方治氏より話題提供されたが、講演会、語る会とも多くの浮世絵ファンが集い、好評のうちに終了した。

●ボランティア活動

本年度で第五回を数える千葉県移動美術館が、流山市郷土資料館と八日市場市中央公民館を会場に開催された。

それぞれの会場では、ボランティアの方々による作品や作家に関する解説会が行われた。日頃の研修の成果を発表する最初の機会でもあり、解説する方はたいへん緊張していたが、結果はなかなかのものであった。また八日市場市中央公民館では、出品作家の大川逞一氏による作品解説も行われた。

来館者

9月	10	永田生慈氏、長野方治氏(太田記念美術館)
9月	20	障害者が住みよいまちづくり運動千葉市実行委員会八名
9月	24	埼玉県立美術館準備室より三名
10月	30	習志野市立図書館長
10月	1	NHK、特別展を取材
10月	2	三重県教育委員会美術館建設準備室二名
10月	5	カナダ大使館より一名
10月	14	浅見喜舟氏、笹岡了一氏、遠藤健郎氏、田中穰氏、中村傳三郎氏、成家雄耕氏、野口貞子氏
10月	13	渡辺学氏、積田鏗士氏
10月	14	中西富江他一名
10月	21	県知事特別展を観覧
10月	21	松山市立子規記念博物館より来館
10月	23	福井県立美術館より作品借用のため来館
10月	24	県教育長県展を観覧
10月	25	松澤茂雄氏
10月	28	熊本県立美術館副館長
10月	1	他一名
11月	1	千代倉桜舟氏

日誌抄

9月	14	美術館・博物館学芸課長会議
9月	17	同和教育研修会
9月	20	講演会「肉筆浮世絵の魅力」(山口桂三郎氏)
10月	3	友の会秋の旅行(栃木方面)
10月	5	美術館協議会
10月	7	千葉県移動美術館はじまる(於流山市郷土資料館)
10月	10	日本画入門講座
10月	14	特別展最終日
10月	20	県展準備のため臨時休館・二十三日まで
10月	24	第三十三回県展開幕
10月	31	県展解説会(工芸部門)
11月	1	県展解説会(書部門)



浅井 忠自作印 (原寸)